

平成六年歌会始御製御歌及び詠進歌

波

御製

波立たぬ世を願ひつつ新しき年の始めを迎へ祝はむ

皇后陛下御歌

波なぎしこの平らぎの礎と君らしづもる若夏の島

皇太子殿下

我が妻と旅の宿より眺むればさざなみはたつ近江の湖に

皇太子妃殿下

君と見る波しづかなる琵琶の湖さやけき月は水面おし照る

文仁親王殿下

東北にて魚追ひたる我の耳にメナムの波は清やかに響く

文仁親王妃紀子殿下

打ち寄する波に向かひて懸命に進む子亀の無事を祈れり

清子内親王殿下

うち寄する波音さえて沖の船ただゆるらかに進みゆきたり

正仁親王殿下

ガラパゴスの浜をめがけて波にのりあしかの群は近づきてくる

正仁親王妃華子殿下

漁火は遠くかすかにゆれうごき函館の海波しづかなり

宣仁親王妃喜久子殿下

四方の国むつみかはして波たたぬ世をこそ祈れ年のはじめに

崇仁親王殿下

さざ波をこがねに富士を紅に染めて初日はいまのぼりゆく

崇仁親王妃百合子殿下

真珠貝採らむと海女の潜きゆく水面に小さく白き波立つ

寛仁親王妃信子殿下

海も空も青ひといろにけふも凧ぎてなぎさの砂を洗ふさざ波

憲仁親王殿下

紺碧の沖繩の海風立ちて珊瑚礁に白く波湧きおこる

憲仁親王妃久子殿下

さはやかに晴れわたりたる春の日の出雲の海は波しづかなり

召人 中西進
永劫の刻空ときにありさくら波木末こずえにあふれ日輪ひろに燃ゆ

選者 千代國一
氷原を出づる流れのささら波音明きやけきをまたぎ吾がこゆ

選者 田谷 鋭
造営の御桶代木みひしろぎ曳く人の足川瀬の波のすすしきを踏む

選者 武川忠一
凍りたる刹那のかたちかがやきて氷の湖うみの波型蒼し

選者 岡野弘彦
冬波のとどろきよする竜飛崎身たつびさきを削ぐ風にまむかひて立つ

選者 岡井 隆
アメリカふかく旅し来たりて波に会ふとびかふ濤なみの大いなる午後

選 歌 (詠進者生年月日順)

ブラジル国 村岡虎雄
サンパウロ市

此の波のはてに祖国の美しと孫に語らひよはひかさねる

宮崎県 森 治平
船べりを離すなど妻に声かけて横波冠かぶりし船たてなほす

長崎県 吉田唯良
船ふなだま霊のよろこびおはすと父いひき夕さざ波がふなべりをうつ

長野県 江口房世
坐礁船のセメント袋つまかへる波しぶく中声かけ合ひて

香川県 泉谷純明
波の穂の放つ飛魚輝きてわが舟の上越えて行きたり

愛知県 林 成一郎
故国の電波微かに捉へ得て熱砂のキャンプに除夜の鐘聴く

山口県 藤本雅子
ゆるやかに電車の過ぎし単線を包みて白く茅花波打つ

山梨県 渡辺照夫
海峡に白波立ちぬわが曳ける掃海浮標を羅針儀に読む

山口県 松原キク
荒磯の次なる大波はかりつつ声掛け合ひて岩の海苔採る

静岡県 山田保弘
直立の稲穂は風に波うちて冷夏の雨が南から又も

佳 作 (詠進者生年月日順)

兵庫県 高宮 一

雄波起つ岬に在す潮佛此処より押し臚網を解く

福岡県 梅田宗茂

能許の浦に沖つ白波かしこみて遣新羅使ら泊まりしいづこ

広島県 藤川玉子

土用波を俱に眺めし山陰の眩しき出遭ひは少女のあの日

東京都 宮崎建一

くだけ散る波を主題の新製品ラベルデザインに夜を徹したり

石川県 淡野美登里

ほてい葵はすみれの色の波となりアユタヤへ遡る船にふれゆく

千葉県 岡嶋あい子

潮みちて河口に寄せるうねり波護岸打ちつつ川のぼりゆく

鳥取県 林原 博

荒波に打ち寄せられし流木を焚きつつ子等は海開き待つ

北海道 前川和吉

山裾を渡るとんぼの群れいまし輝く波となりて向き変ふ

山口県 吉武久美子

流れ寄る昆布を巻きこむ浦波のうねりは重く浜に打ちよす

愛知県 伊藤正彦

いとけなき薔薇の唇吹きすぼめ熱きミルクを波立たせたり

千葉県 菊池千恵子

心電図の波形正しく流れ出で患者の頬にあかみさしくる

東京都 岩本文子

炎となり響みし音の波引きてコントラバスの低き眩き

北海道 伊藤及子

背丈より長き昆布をひきずりて砂地を走る子を波が追ふ

千葉県 猪野富子

竹篋もて土剥ぎとれば縄文土器波状口縁つばらかに見す

愛知県 岩月貴子

穏やかに打ち寄せる波ゆつたりとただゆつたりと過ぎてゆく時

大阪府 重富しのぶ

あの波の下に父母ゐると泣く奥尻の子の夏は終わぬ